

福竜丸だより

都立・第五福竜丸展示館ニュース



発行 (財)第五福竜丸平和協会
〒136 東京都江東区 夢の島3-2
都立第五福竜丸展示館内
電話 03-3521-8494

船にしみ込む合唱曲——修学旅行の中学校あいつぎ見学

登んだうたごえが船にしみ込むように流れました。今年も訪れた多くの中学校が、第五福竜丸の前に、平和の集いを持ち、平和への強い決意を述べ、全員合唱を響かせました。

四月二十七日訪れた三重県の多気中学校三年生二十五人は、カンタータ「大地讃歌」を四部合唱。

「この生命なる大地を我ら守る…」と、その声は船腹に残る無数の傷跡を癒し、船を包み込みました。全国中学校合唱コンクールでの入賞も多いという学校で、いつも伴奏の入ったテープ、マイクを持参、第五福竜丸の前で合唱すること、修学旅行のメインのひとつ「綾野校長」で、もう数年続けられて



節也さんを偲ぶ山下さん夫妻 4月29日・第五福竜丸展示館

ビキニの海は忘れられない
水爆実験被災船を追い続けた高知県の高校生の心の支えとなった藤井節也さん。お姉さんの山下清子さんが、四月末、ご夫妻で来館、船の隅々に温かい目を注ぎました。長崎の原爆に被爆、その後漁船員になり、ビキニ海域のまぐろ漁で水爆実験に被災、入院中の一九六〇年久里浜で入水自殺したこの若き船員の苦悩の生涯と母親馬さんの証言は人びとの胸を打ちます。「弟の乗っていた船はもっと小さかった」と清子さんは節也さんを偲び「この船と共に保存を」と遺品の寄贈を約束されました。

います。折鶴と共に前年来館した卒業生の感想文集が贈られました。四月十四日に訪れた岩手県石巻市郡松尾中学校三年生一十七名も、船に對面して「合唱集会」。青空にいま翔びたとう」と雄大に「つばさ」をうたいあげ、「昂」の四部合唱曲が船にこだましました。滋賀県の彦根中学校三年生一六四名は、自由に見学したあと、船首をとり囲むように集い男子生徒が「我らの平和の誓い」を声高らかに朗唱、まだ見ぬ船に思いをこめて一人一人が綴ったという「詩文集」を贈りました。



“ゴールデンウィーク”は若い人々にぎわった

四月の来館はおよそ六〇団体。福島・岩手・山形・滋賀・和歌山県などから三〇を超える中学校が修学旅行で来館しました。連休中、若い人びとで溢れた展示館でしたが、これから連日、第五福竜丸誕生のふるさと和歌山県から七〇近い中学校が訪れます。平和行進広島へ出発
五月七日、日本山妙法寺の平和祈念行脚が、展示館前で出発集会を持ち、夏の広島へ向いました。平和・エコロジー・先住民族への連帯を志す市民運動「いのちのちへいわのじゅんれい」の若者たちも色とりどりの服装、横断幕をかかげて合流。カナダから駆け付けた

若い女性の姿もあって、久保山愛吉記念碑に合掌し、核兵器廃絶の願いをうちわ太鼓の響きにこめて出発。紫の南無妙法蓮華経ののぼりと青い布地に宇宙から見た緑の地球を染めた旗が風にゆれました。翌八日、原水爆禁止世界大会実行委員会の提唱による一九九三年原水爆禁止国民平和行進の広島コー스가展示館前を出発。出発集会には七百名をこえる人びとが集い核兵器廃絶国際協定の締結、被爆者援護法の制定をめざす運動の強化をアピールしました。また九日、日本生活協同組合連合会などの市民行進も展示館前を出発しました。

「いま、私のできること」

中村 博

戦争が終わって間もなく、私は教師になりました。その当時一年生を担任しました。子どもたちは昭和十六、七年生まれ。どの父親もといっているくらい兵隊に行っていましたし、まだ、復員していない父親もいました。中には戦死して、父親の顔も知らない子どももいました。母親も、戦争の経験を持つたばかりでした。ですから「戦争は嫌だね」と話しても、誰も「偏向教育だ」とは言いませんでした。

私が戦争に反対し、平和を語ると、どうしても自分の体験が中心になって、熱く語ることが多いのでしょ。いつのころからか教えるの親から「あの先生はアカじゃないか」と言われるようになりました。

その頃出会ったのが『たった一つのおかし』(市川信天作)という児童文学でした。この話は、戦時中の子どもが、隣組に配給されたお菓子をお母さんの留守中に食べてしまったことからの、お菓子に対する思い出話なのです。

これを授業につかってみました。するとどうでしょう。子どもたちの母親や父親からものすごい反響がありました。親たちがこの作品に出でくる子どもと同年代だったのです。再び親たちが自分の子どもに戦争を語り始めました。

その次の時期が「第五福竜丸」でした。十数年前、教え子たちをつれて見学に行きました。世界が原水爆の実験に血眼になっているころでした。私どもが「反対」を叫ぶと「あれは偏向だ」と言われる程になっているころでした。子どもたちにあるのままの姿をみせ原水爆のすさまじさを見せました。家に帰った子どもたちが、この日各家で語った中身は私には分かりませんが、翌日親たちから沢山の手紙をもらいました。励ましと、感情でなく科学的に物事をとらえる目を教えてくれたという感謝でした。

私は、十五年前教師を退職して、自分の家を開放して、小さな家庭文庫をひらき、全国の民話を掘り起こしてい

ます。

そういう私に、昨年私どもの友達である堀田てる子さんから「久保山さんの命日に、子どもたちやそこに集まった方に、何かしてみたい」と、お誘いがありました。紙芝居や絵本や民話の語りで一時間ぐらいのプログラムをつくり参加しました。また、今年に入って、文庫の遠足に第五福竜丸の見学をという事で出かけてみました。この時も即席で紙芝居と絵本の読み聞かせと民話の語りをしました。

終わったあと、私たちの食事をしてるまわりに、いろいろな方がやって来ました。「私は、茨城県から来たのですが、こういう会をいつもやっているのしょうか。こんど高校生を連れてきたいのですが、そのときもやっていただけませんか」とか「こういう紙芝居の上手なやり方を勉強するところはあるのでしょうか」というような相談や「丁度私の生まれた年が、第五福竜丸が被爆した年なんです。初めて鮪が食べられなかったと知りまして」というおおかあさんの声。

いま、政治改革という名目で、平和憲法を変えようとする声が強まっています。私、私のできることをここで考えたいと思う。

(世田谷・ともだち文庫)

●連載(三回) 1 「チェリアビンスク事件」共同調査の顛末に思う

森 一久

一九九〇年夏私の事務室。(旧)ソ連保健省放射線生物研究所第四支所のコセンコ女史との押し問答は、もう小一時間も続いていた。その数日前、チェルノブイリ事故の生物学的影響についての初の日ソ共同シンポジウムの席上、四〇年前核兵器製造の秘密都市の一つチェリアビンスクで高レベル放射線廃棄物を公共河川テチャにたれ流したという、とんでもない事件と、その長年に亘る放射線影響の追跡調査の一部が突如発表された。そこで、私はその人体影響と疫学調査を、日ソ共同研究として取り上げたいと申し入れていたのである。

当方の気持ちは、中々判って貰えない。そればかりか、同氏は「一体、この研究で森さんはなんの得があるのか」という質問を發した。些か頭にきた私は、米ソの原水爆競争の最中の事とはいえ酷すぎる住民無視への義憤、ヒロシマの時のこと、その影響研究のことも意義、等々、一気にまくしたてた。その剣幕には、通訳もコ氏も

当惑の風情にみえたが、つい「私は広島出身なのですが…」という言葉を口にしたとき、女史の眼に光るものが宿っていた。「よくわかりました。全面的に協力したい。でも、私は四〇年間秘密都市を一步も出ず、ひたすら研究と治療に携わって来た一介の責任者。上層部を説得する力はない。でも、もし貴方が国の保健省の幹部を動かして、わたしに中央からゴーサインが来たら、私は何でもします。」

このようにして、広島放射線影響研究所、国立放射線医学総合研究所、原子力安全研究協会などの専門家グループとのあいだで、共同評価作業を始めることができた。そのミラ・コセンコさんは、肝っ玉かあさん風の、旧ソ連はこのような有能で骨太で誠実な人々によりささえられていたのか、と思えるような頼もしい女性。以来毎年八月六日には、彼女から「ヒロシマの人々に幸あれ」というファックスがとどいてくる。

さて、ある集団(この場合三四、〇〇〇人)が自然の放射線以上の放射線を浴びた時、生じ得る影響のうち確率的に現れるもの(各種ガンなど)を追跡調査し、被曝線量との関係を研究するのを放射線疫学というが、日本と現地で三回の共同セミナーをひらき、それまでのソ連側の研究結果を詳細に聞き、議論を重ねた。その結果、対象集団の把握、診断データ、統計処理の方法などは、今後の共同作業で見込みつきそうだが、肝心の住民が受けた放射線量については、殆ど裏づけが示されなかった。

居住地の放射能分布は、データもかなりあり、また精密な現地調査で今からでも推定できるけれども、事件以来今日まで、住民がその上でどのように動きまわり、川で泳ぎ、どんな飲食をしてきたか、等の資料がなければ、被曝線量を推定しようがない。しかし第四支所ではその資料には手が届かないという。ではと、直接ソ連保健省に手をつくして要請した結果、ようやく「住民挙動」の調査分析を担当したというサウーロフ博士が来日したのは、昨年はお始めのことであった。

しかしサ氏が同行の上司の人の立会いで行った口頭発表には、一片の新たな表が示されたのみ。そ

の表中の矛盾についての質問にも老齢のサ氏は固い表情で無言。これでは共同評価を続けても成果は期待できないと、人件費にも事欠く先方の状況に後ろ髪を引かれる思いながら、やむなく中止を申し入れたのであった。

考えてみれば、住民の挙動を發表するという事は、事件後の住民対策の全貌を語る事になる。短時間許された住民の方々との面会の印象からも、発表すれば混乱は避けられないとおもわれる。

今日では旧ソ連で何が暴かれても、また起こっても、不思議でないが、核兵器の秘密都市だけでも一〇もあり、同実験場三つも秘密のベールのなか。グラスノスチなどといって、あの国の権力者の争いは連日テレビを賑わせているが、真の民主主義はいつ訪れるのだろうか。

このように軍備と戦争のもたらすもの、大衆の犠牲に思いを致すとき、消費大国日本が中近東に支払っている大金は、大半が武器購入に当てられている事にも思いが及ぶ。「平和国家」日本の世界への責任というものも、恐ろしいほど深刻なものとなっている。(日本原子力産業会議専務理事・協会評議員)

木と船と建築と

日塔和彦

最近の自然保護に対する世界世論の盛り上がりには大変なものがある。特に木材については台湾の檜は勿論のこと東南アジアの熱帯雨林や北欧材にまで日本への輸入に禁止あるいは待ったがかけられている。本来、日本においては木材消費量が樹木の成長量を上回ったことはなく、鉄やコンクリートと異なって再生可能な資源であったはずである。このバランスが崩れたのは高い紙の消費量と戦中戦後の山林乱伐の影響および人手不足からくる山林荒廃などが原因といわれている。

江戸時代には北海道を除き、日本の森林の八割はすでに人工林で自然林は極僅かであったとの調査がある。これは日本人が古来からいかに多く木を利用してきたかという事実と同時に木を大事に育ててきたかを示している。しかし、この様に森林が豊富なのは日本だけではない。一部の砂漠地帯や草

原地帯を除けば、古代の地球は豊富な森林に覆われていたはずである。北欧はいまも森林が豊富であるが、フランスやドイツなども同様に豊かであった。東南アジアのタイも僅か三百年程前は国土全体が熱帯雨林に覆われていたのが現在では草原や灌木地帯に変わっている。日本が現在のように森林を放り出している、他国の二の舞を踏んでしまふのは明らかである。

さて、木で造ったものは建物だけではない。船も木で造った。エジプトのパピルス船は有名であるが、今度日本で復原修理される予定の五千年前のクフ王の太陽の船は巨大な木造船である。その他近年各国で発見されている古代中世の沈没船やバイキングの埋葬船は当然ながらすべて木造である。これらの実物から明らかになる造船技術は予想を超えて高いものであることが判りつつある。日本に於ける木造船は古代の丸木舟が発

掘されるものの、部材を組合せた近世以前の構造船は発見されていない。僅かに船絵馬や奉納模型などで想像ができる程度である。現在では小舟の準構造船は祭礼などで今後も残る可能性が高いが、大型木造船は第五福竜丸が唯一の保存例となってしまう。現在、文化庁が進めようとしている近代化遺産としての文化財指定も将来は考えられるのである。

木工技術は建築に比べ、造船のほうが進んでいた。戦後においても漁船の造船が活発になると建築大工は賃金の高い船大工へと転身している例が瀬戸内地方にみられる。また、漁村や島の民家を調査していると船大工が造ったという家に出会うときがある。梁曲材や船釘を用いた丈夫で上質な建築が多い。特に伊豆諸島や瀬戸内海に多く見られるのは船大工が多いためでなく、風対策も考えられよう。

船大工がつくる家は世界各地にも残っている。コヒーで有名なインドネシアのトラジャ族の住居は船型住居として知られており、船を持ち上げた格好となっている。しかし、現在の建築技術には造船技術の影響がほとんど見られず、

ただ船の形に似ているに過ぎないようである。北欧にはバイキングが建てたステープチャーチと呼ばれる十二世紀ごろの古い木造教会堂が各地に残っている。この建築はバイキングのロングシップ船に見られる構法や細部をそのまま持っていて、船大工が造ったことが良くわかる例である。

ヨーロッパや地中海などは木造文化でなく石煉瓦の組積造文化と見られがちであるが、現在でも田舎にいくと木造農家が残り、かつては記念建築物を除いて木造が主流であったことを示している。造り方は建築史研究の進歩により次第に明らかになりつつある。東南アジアの遺跡、例えばアンコールワットにおいても、現在は組積造部分しか残っていないが、もとは木造との複合建築であった。木造部分は朽ちて僅かに柱穴や石や煉瓦に残る柄穴が残るにすぎない。これら世界各地の木造建築には、かなりの密度で木造の造船技術が係わっていることが想像されるのである。

(文化財建造物保存技術協会)